論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報　告　番　号	甲　第　1247　号	氏　　名	川 本 真 貴 子
論 文 審 査 担 当 者	主　　査　　駒 津 光 久　　教授 副　　査　　野 見 山 哲 生 教授・桑 原 宏 一 郎　教授　　・		

（論文審査の結果の要旨）

口腔乾燥症は唾液腺の機能異常を伴い唾液の分泌が低下することにより持続的に発症する口の乾きを示す病態で、その原因は全身疾患をはじめ様々である。腎硬化症では高血圧が細動脈硬化を引き起こし腎機能低下の原因となると報告されている。しかしながら、高血圧症が唾液腺に与える組織学的影響は不明である。本研究の目的は、疫学的および病理組織学的に口腔乾燥と高血圧症との関連を調査検討することである。

本研究では、疫学的研究と病理組織学的研究を行った。疫学的研究では長野県安曇野市および塩尻市で国保特定健診を受けた 1,933 名（895 人の男性と 1,038 人の女性）を対象とし、歯科健診で柿木の臨床基準に基づき判定した口腔乾燥の有無と特定健診結果との関連を統計学的に分析した。病理組織学的研究では、2013～2017 年の期間に信州大学医学部附属病院で頸部郭清術を施行した頭頸部癌患者 49 名を対象とし、病歴から高血圧症の有無で２群に分け、⑴顎下腺の体積⑵唾液腺腺細胞の割合⑶唾液腺細動脈の動脈硬化を比較した。

その結果、川本真貴子は次の結論を得た。

1. 疫学研究において、単変量解析では女性、年齢 70 歳以上、高血圧既往あり、内服薬あり、降圧剤内服ありの群で口腔乾燥との有意な相関を認めた。
2. 疫学研究において、多変量解析では性別、年齢、高血圧、高脂血症で口腔乾燥との相関を認めた（高脂血症では負の相関）。
3. MRI 画像による比較では高血圧群と対照群で顎下腺の体積に有意差は認めなかった。
4. H-E 染色において高血圧群では唾液腺組織全体に占める腺細胞の割合が有意に低かった。
5. EvG 染色において高血圧群では顎下腺内の細動脈の肥厚を認め、内膜/中膜比が有意に高かった。

これらの結果により，高血圧症が加齢変化に相乗して細動脈硬化を引き起こし、唾液腺組織を変性させ、唾液分泌低下・口腔乾燥の原因となる可能性が示唆された。

主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。